

Ⅱ. 特集 立教サービスラーニング(RSL)とその先にある学び

「立教サービスラーニング (RSL) とその先にある学び」の趣旨について

RSL センター 教育研究コーディネーター
大森 真穂

学生が一つの科目を学び終えるということは何を意味しているのか。また、学生は履修後の学生生活のなかで、自身の学びをどのように意味づけ、位置づけながら、次の学びへとつなげているのだろうか。この特集はこれらの問いについて考える一つの試みである。それは、「サービスラーニングはサービスラーニングのみで閉じない、完結しない」（逸見敏郎・原田晃樹・藤枝聡編著『リベラルアーツとしてのサービスラーニング—シティズンシップを耕す教育』2017年、p.67）といった、立教サービスラーニング (RSL) センター（以下、「RSL センター」）の基本姿勢に基づくものでもある。

「自由の学府」を掲げる本学において、RSL 科目は正課教育として講義系・実践系の両科目を全学共通科目のなかで展開している。学部の特長性や学年の枠を越え、多様な背景や関心を持つ学生がそれぞれの専門性や背景に立って共に学びあえることが、全学共通科目ならびに RSL 科目が持つひとつの特徴である。また本学では、「RIKKYO Learning Style」に表されているように、正課外教育を含め、学生生活そのものを「学びの場」としてとらえており、RSL センターもボランティアセンター等と協力・連携しながら、科目履修後も含めた学生の学びに寄り添い、正課と正課外における学びの往還を支援することを重視して事業を展開している。

上記の点を意識しつつ、この特集では RSL 科目を履修した学生に対して、RSL 科目を履修した動機や RSL での学びを通して変化した社会への視点・他者との関わり等について振り返り、履修後も含めた自身の学生生活における学びの軌跡について言語化することを依頼している。



今年度の執筆学生の履修科目および履修年度は、次の通りである。



- ・「RSL-コミュニティ（埼玉）」（2021 年度）
- ・「RSL-ローカル（地域共生）」（2022 年度）

2022 年度は、社会全体において 2020 年度から続いてきた COVID-19 による制限が徐々に緩和され、本学においても、感染対策に配慮することを前提として対面授業や宿泊形式のプログラムの実施が広く認められるようになった。学生たちの体験談からは、このような環境の変化のなかでも冷静に現実を捉え、社会の現場での出会いや気づきをとおして、自分自身が過ごしてきた生活や環境、それらによって形成されてきた自らの価値観を見つめなおし、次なる一步を踏み出そうとする学生たちの姿が浮かび上がってくる。このことは言い換えれば、当センターが掲げてきた「当たり前」を疑うということであり、また、ひとりの市民として新しい社会をつくることの意味を考え、その手法を身につけるということでもある。


この特集は今回で 4 回目の試みとなるが、今回も、RSL 科目の履修をとおして高校時代から抱き続けた葛藤と向き合い新たな目標を見つけた学生、RSL 科目を履修した際に考えた自らの企画を正課外活動として実現した学生—それぞれが地域社会やそこに生きる他者と関わりあい、履修後も自らの関心に基づきながら前向きに学び続けようとする姿勢を読み取ることができる。そしてこれらの学生たちの語りから、私たちも改めて「シティズンシップ」とは何かということを学ばせてもらっているように感じる。この財産を真摯に受け止め、育み、積み重ねることで、RSL センターのさらなる展開に活かしていきたい。関係者の皆様には、改めまして心より御礼申し上げます。

□2022年度 立教サービスラーニング(RSL)実践系科目概要

<p>科目名 (2単位)</p>	<p>全学共通科目「多彩な学び(知識の現場)」科目群 「RSL-コミュニティ(池袋)」 多文化共生と相互連帯</p>
<p>日程 フィールド (2022年度)</p>	<p>秋学期：集中(水曜日3限:13:25~15:05) 事前学習:2022年9月21日、9月28日、10月5日、10月12日(全4回) 現地活動:2022年10月下旬~12月中旬の期間内で計6回の活動(日帰り) 事後学習:2022年12月14日、12月21日、2023年1月11日、1月18日(全4回) フィールド:東京都豊島区(池袋を中心として)</p>
<p>担当者</p>	<p>福原 充(本学兼任講師)</p>
<p>履修者定員</p>	<p>20名</p>
<p>内容</p>	<p>この授業では、国際化に対応した都市づくりが行われている豊島区において、多文化共生の地域社会づくりを進める「池袋」を取り巻く歴史・現状・課題を、地域関係者等の支援を得ながら掘り起こすこと、そして、住民との協働を通じて、その課題発見および改善のための仕掛け・仕組みづくりの過程を明らかにしていくことを目的としている。学生は3つのテーマ(「歴史・記憶」「次世代・子育て」「芸術・文化」)のグループを編成し、豊島区(おもに池袋地域)で活動する方々との対話(インタビュー等)を通じて、それぞれのテーマについての考察を深めていく。</p> <p>学生たちは、豊島区で活動する方々との対話を通じて、①池袋の地域特性、多文化共生の現状と課題を理解すること、②自分の関心と池袋の多文化共生の課題との接点を理解すること、③多様な主体との対話を通じて、相手の立場等を理解・尊重した上で、自分の考えを提示できるようになること、そして、④多文化共生をめぐる地域の諸課題を発見し、その改善のための方法を計画できる能力を身につけることが期待されている。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>



<p>科目名 (2単位)</p>	<p>全学共通科目 多彩な学び(知識の現場)科目群 「RSL-コミュニティ(埼玉)」 生活困窮者への埼玉県アスポート学習支援</p>
<p>日程 フィールド (2022年度)</p>	<p>秋学期 :集中 (金曜日 5限:17:10~18:50) 事前学習:2022年9月23日、9月30日、10月7日、10月14日(全4回) 現地活動:2022年10月中旬~12月中旬の期間内で計8回の活動(日帰り) 事後学習:2022年12月16日、12月23日、2023年1月6日、1月20日(全4回) 〈フィールド:受け入れ先〉 埼玉県内におけるアスポート学習支援事業(学習教室) :一般社団法人 彩の国子ども・若者支援ネットワーク(通称アスポート)</p>
<p>担当者</p>	<p>田中 聡一郎(本学兼任講師)</p>
<p>履修者定員</p>	<p>15名</p>
<p>内容</p>	<p>厚生労働省によると、日本で貧困状態にある子どもの割合は、現在7人に1人といわれている。特に相対的貧困として語られる日本の社会状況では、子どもの貧困は可視化することが難しく、様々な事情から学びたいのに学べない、学ぶ意欲が持てない子どもたちが社会から置き去りにされている現実がある。</p> <p>この授業では、サービスマーケティングの手法に基づきながら埼玉県内の生活困窮世帯に暮らす、小中学生の学習支援事業への参加を通じて日本の社会保障制度の中心的政策のひとつである生活保護制度の運用実態に触れるとともに、貧困と格差、社会的包摂等を巡る諸問題についての理解を深めることを目標としている。</p> <p>学内での事前学習では、生活保護制度や子どもの貧困について学習し、学外での活動として、一般社団法人彩の国子ども・若者支援ネットワークが主催する「アスポート学習支援」(学習教室)に、学習支援ボランティアとして履修者が参加する。また、事後学習として、「アスポート学習支援」のスタッフの方を交えた学びの報告会を実施し、学生と活動先、それぞれの立場からみえたことを言語化し共有する。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 20px;">   </div>

<p>科目名 (2単位)</p>	<p>全学共通科目 多彩な学び(知識の現場)科目群 「RSL-ローカル(南魚沼)」 雪掘りと農村交流を通して持続可能な社会を考える</p>
<p>日程 フィールド (2022年度)</p>	<p>秋学期 :集中 事前学習:2022年12月10日(土)13:30~17:30(全1回) 現地活動:2023年2月5日(日)~2月8日(水):4日間(宿泊) 事後学習:2023年2月21日(火)13:00~16:00(全1回) 〈フィールド:受け入れ先〉 新潟県南魚沼市清水集落・栃窪小学校他:特定非営利活動法人 ECOPLUS</p>
<p>担当者</p>	<p>高野 孝子(本学客員教授)</p>
<p>履修者定員</p>	<p>15名</p>
<p>内容</p>	<p>この授業では、過疎高齢化の進む農村での体験的な学習を通して、現代社会の構造を知り、自然と人間の関係や本質的な豊かさについて問い直し、持続可能な社会の実現について考えることを目的としている。</p> <p>一般に「雪下ろし」「雪かき」と呼ばれる除雪作業のことを、豪雪地帯では、「雪掘り」と呼ぶ。これは、雪の量が多く「掘る」ような作業が多いためである。この除雪の方法を地元の人たちに教えてもらい、除雪を手伝いながら、豪雪地帯での雪掘りを中心とした活動や住民との交流を経験し、雪国で暮らすとはどういうことかを理解する。また、雪で閉ざされた暮らしの中で培われた、食べ物を保存する知恵などを学び、持続可能な暮らしを考える。さらに、家庭訪問を通じて、集落での暮らし、伝統や文化、食、四季、自然の恵み、今と昔の生活の違い、子どもたち、集落のこれからなどの多様な話を聞く。そして、地元の超小規模小学校への訪問や雪と触れ合う活動を行う。これらの活動を通じて、伝統知や地域文化、人と自然の共生や豊かさ、コミュニティの意味、社会における市民としての役割を考える。</p> <p>事前・事後学習だけでなく、現地活動中も、毎晩、振り返りの機会を持ち、また、現地での活動を気づきや学びに落とし込むためのディスカッションを実施する。そして、現地活動最終日にも、学んだことを全体で発表し、共有する。</p> <div data-bbox="395 1503 1369 2007"> </div>

<p>科目名 (2単位)</p>	<p>全学共通科目「多彩な学び(知識の現場)」科目群 「RSL-ローカル(地域共生)」 SOCIAL&PUBLIC (SDGs とグローバルの可能性・実践編)</p>
<p>日程 フィールド (2022年度)</p>	<p>春学期 :集中 事前学習:2022年6月23日、6月30日、7月7日、7月14日 木曜日・3限(13:25~15:05)(全4回) 現地活動:2022年8月3日(水)~8月7日(日):5日間(宿泊) 事後学習:2022年8月23日(火)13:30~20:30(全1回) <フィールド:受け入れ先> 埼玉県熊谷市:埼玉福興株式会社、有限会社 PUBLIC DINER</p>
<p>担当者</p>	<p>加賀崎 勝弘(本学兼任講師)</p>
<p>履修者定員</p>	<p>15名</p>
<p>内 容</p>	<p>SDGs は「持続可能な社会」と同時に「誰ひとり取り残さない社会」を目標としており、SDGs が掲げる 17 の目標(Goal)は相互に関連しあっている。例えばしょうがい者であることで社会参加ができないという課題に対しては、人にあわせた仕事の創出等の工夫により、Goal「3.すべての人に健康と福祉を」、「8.働きがいも経済成長も」、「9.産業と技術革新の基盤づくり」、「11.住み続けられるまちづくり」といった複数の Goal へのアプローチが可能となる。</p> <p>この授業では、埼玉県熊谷市でのフィールドワークを通して、SDGs とグローバルの可能性について体験的に学び、SDGs の掲げるこれらの Goal を自分ごととして理解し、課題解決に必要な視点や方法を身につけることを目標としている。</p> <p>現地活動では、しょうがい者等の雇用による農業生産(農福連携)に取り組むソーシャルファーム「埼玉福興株式会社」と“地域を食でデザインする”をコンセプトに活動する飲食店「PUBLIC DINER」の協力を得て、しょうがい者との農作業やロゴマーク作成、草木染などを体験し、食を巡る一連の過程への理解を深めるとともに地域における社会的包摂のあり方について実践の中から五感で学んでいく。</p> <div data-bbox="411 1442 1369 1854">  </div> <p>【付記】本科履修生と加賀崎兼任講師は、東京大学公共政策大学院主催「チャレンジ!! オープンガバナンス 2022(COG2022)」にエントリーし、オープンガバナンス総合賞並びにオンライン投票ファイナリスト銀賞を受賞した。</p>

<p>科目名 (2単位)</p>	<p>全学共通科目「多彩な学び(知識の現場)」科目群 「RSL-グローバルA」 実践SDGs—河川/海洋ごみ問題の現場から学ぶ社会課題—</p>
<p>日程 フィールド (2022年度)</p>	<p>秋学期：集中 事前学習:2022年12月5日(月)、12月12日(月)3限(13:25~15:05) (全2回) 現地活動:2023年2月4日(土)~2月8日(水):5日間(日帰り) 事後学習:2023年2月20日(月)、2月22日(水)、2月24日(金) 3限(13:25~15:05) (全3回) 〈フィールド:受け入れ先〉 荒川河川敷(東京都江戸川区):特定非営利活動法人荒川クリーンエイド・フォーラム</p>
<p>担当者</p>	<p>今村 和志(本学兼任講師)</p>
<p>履修者定員</p>	<p>20名</p>
<p>内容</p>	<p>この授業では、世界的に注目されている「海洋ごみ問題」が、私たちの身近な社会課題と相互につながっていることを、大学での講義、現場でのフィールドワークを通じて理解し、その解決に向けた取組を実践することを目的としている。具体的には、荒川河川敷をフィールドとして、国内屈指の流域人口密度を誇る「荒川」が抱える社会課題の1つである「河川ごみ問題」に焦点を当て、当該問題が生じる原因を講義で学び、解決に向けた「河川清掃イベント」を計画し、実際に、そのイベントの運営を行う。そして、現場・現実・現物の視点からSDGsの掲げるGoal「12.つくる責任、つかう責任」「14.海の豊かさを守ろう」「15.陸の豊かさを守ろう」「17.パートナーシップで目標を達成しよう」について考える。</p> <p>河川清掃イベントの企画運営に関しては、①事前に、社会課題としての河川/海洋ごみの問題についての学習を行い、インターネットを活用して荒川清掃イベントの広報やマーケティングを行う。②荒川河川敷での現地下見、草刈りなどの安全管理、埋没した河川ごみのかき出しなどの現場整備、当日のイベント運営、自治体へのごみ処理手配など、イベント運営の全体を経験する。③社会課題としての「河川ごみ問題」の啓発活動について、自分たちの河川清掃の様子などを動画で撮影し、ショート動画を作成することを通じて実践的に学ぶ。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>

<p>科目名 (2単位)</p>	<p>全学共通科目「多彩な学び(知識の現場)」科目群 「RSL-グローバル B」 まちの未来をつくるアクターから学ぶ地域づくりの最前線</p>
<p>日程 フィールド (2022年度)</p>	<p>秋学期 :集中 事前学習:2022年12月3日、12月10日土曜日・13:30~16:30(全2回) 現地活動:2023年2月15日(水)~2月20日(月):6日間(宿泊) 事後学習:2023年2月22日(水)、2月23日(木)13:30~16:30(全2回) <フィールド:受け入れ先> 埼玉県比企郡小川町:特定非営利活動法人 霜里学校</p>
<p>担当者</p>	<p>中沢 聖史(RSLセンター特任准教授/RSLセンター副センター長)</p>
<p>履修者定員</p>	<p>15名</p>
<p>内 容</p>	<p>この授業では、埼玉県比企郡小川町でのフィールドワークを通して、日本の多くの地方都市が直面する少子高齢化や人口減少などの課題を学ぶとともに、その土地固有の社会課題とその解決に向けた取組みについて理解を深める。そのうえで、自身が暮らしてきた(あるいはいま暮らしている)地域の課題や展望を様々な角度から見つめ直し、自分自身が将来どのように地域づくりに参画したいかを明確化し、実際に行動するために必要なステップについて考えることを目標としている。</p> <p>現地活動では、古民家を再活用した「小川まちやど」に宿泊し、地域内の経済循環やヒトやモノの交流に積極的に関わる団体や人物(農家、社会起業家、カフェ、古民家、地域おこし協力隊等)、地域との協働による学習プロジェクト「おがわ学」に取り組む埼玉県立小川高等学校への訪問、活動の見学・参加などを行う。これらの体験をとおして、「その町らしさ」を起点にした地域づくりの方法について実践的に学び、履修者自身がそれぞれ地域社会にとってどのようなアクターでありたいかについての考えを言語化し、クラスで共有しながら深めていく。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>

プログラム名	「RSL-グローバル(フィリピン)」パイロットプログラム
日程 フィールド (2022年度)	秋学期:パイロットプログラム(単位認定なし)として現地活動のみ実施 現地活動:2023年2月5日(日)~2月18日(土):14日間(宿泊) 〈フィールド:受け入れ先〉 フィリピン・ケソン市(マニラ近郊):フィリピン・トリニティ大学
担当者	中沢 聖史(RSLセンター特任准教授/RSLセンター副センター長)
参加定員	10名
内容	<p>2022年度の正課科目「RSL-グローバル(フィリピン)」(秋学期)は休講であったが、最近の海外渡航の緩和を踏まえ、“正課外”プログラムとして、海外でのサービスラーニングをパイロット実施した。</p> <p>学生は、立教大学のグローバル・ネットワークである CUAC(世界聖公会大学連合会)とフィリピンのトリニティ大学が実施する2週間のサービスラーニングのプログラムに参加し、トリニティ大学周辺の地域社会(Barangay)における現地活動を中心に、大学での講義とワークショップを通じて、フィリピンにおける高齢者や女性の貧困や公衆衛生など、地域社会が抱える課題とその解決策を学んでいく。</p> <p>なお、このプログラムには、韓国、フィリピン、インド、日本など、アジアの多様な学生が参加しており、学生たちは、開会式や閉会式などのセレモニー、マニラ市内の観光ツアー、少人数のワークショップ、2週間の学生寮での共同生活等を通じて参加者同士の交流を深め、多文化的な雰囲気の中で学ぶことができる。2022年度は、コロナ禍であるため、地域社会での現地活動は、活動時間数を例年の半分の20時間に縮小し、また、新型コロナウイルスワクチン接種が進んでいない乳幼児・児童との交流を制限して実施された。それでも、学生たちは、それぞれの地区の担当教員の指導のもとでの現地活動に加え、大学での講義、少人数グループでのワークショップとディスカッション、毎日の活動の振り返り、マニラ近郊の観光、チーム対抗のレクリエーション活動を通じて、チームワークの大切さや、フィリピンの貧困の現実とその解決策について理解を深めることができた。</p>
	 

「RSL-コミュニティ(埼玉)」とその先にある学び

経済学部経済学科 清水 彩花
社会学部メディア社会学科 滝山 亜純
(2021 年度履修)

<はじめに>

私たちは、2021 年度秋学期に「RSL-コミュニティ(埼玉)」(以下、「RSL 埼玉」)を履修しました。この授業では、埼玉県内の各地で生活困窮世帯の小・中学生を主な対象として「学習支援」と「家庭訪問」活動を展開する一般社団法人 彩の国子ども・若者支援ネットワーク(通称アスポート)の事業に学習支援ボランティアとして参加し、アスポートへの事業提案を事後学習で行いました。私たちが授業内で行った母子世帯を対象としたフードドライブの事業提案について、アスポート様にもその意義や必要性を認めていただいたことから、調整を重ね、2022 年の秋に正課外活動として実施することとなりました。

<RSL 科目を履修するきっかけ>

「RSL 埼玉」の履修を決めたのは、中学・高校時代の後悔がきっかけでした。私が通っていた中学校、高校はキリスト教系の学校であったため、奉仕活動として炊き出しや被災地支援など、ボランティア活動をする機会が沢山ありました。高校 3 年生の頃、自分のこれまでの中高生活を振り返ってみて、留学などの自分が主体となって学ぶ場所には出向いてきたけれど、せっかくそのような機会が多く用意されていたのに、「誰かのために何かをする」という経験をしてこなかったことに気が付きました。そして、何かやりたいと思った時に、ボランティアに参加できる機会がすぐそばにあるという環境はとても貴重なものであったということにも気づき、大学では他人のためにできることを主体的にやってみたいと思いました。また、塾講師のアルバイトを通して指導の技術以上に生徒との関係構築の大切さを学び、自ら歩み寄り心を開いてゆくことの楽しさとやりがいを感じていたため、その経験は学習支援教室でも活かしていけるのではないかと考え、「RSL 埼玉」の履修を決めました。

(滝山)

<履修中の学び>

履修中、活動先の学習教室で大きく印象に残ったこと、それに伴って考えたことが大きく分けて 2 つありました。

まず 1 つ目は、全 8 回のボランティア活動のうち 5 回目の出来事です。その日、担当したのは中 2 の女子生徒でした。指導員の方から事前に彼女はあまり学校へ行けていないと聞いていました。確かに一緒に学習の理解度を確認してみると、学校の授業を休んでから特に数学はついていけない様子で基礎が弱く、吸収力、理解力も良いとは言えませんでした。それに加え、2 週間後が中間試験だということを聞き、正直教える自分自身も焦ってしまいました。しかしその日の活動を終え、振り返りをしていくうちに、そもそも学校へ行けなくてもアスポートには来ることができること自体、素晴らしいことなのではないかと思うようになりました。そして何より子どもが安心して来られる環境を創りだしている職員の方々の絶え間ない努力があるのだと考えました。このことから得られた大きな気づきは、アスポートはただの勉強する場所ではなく、それぞれの子たちの「居場所」だということです。自分もその子に関わる一員として、この大切なアスポートという居場所を、私

の対応のせいで「行きたくない、居心地の悪い場所」にはいけないと責任を感じました。ボランティアは時に偽善と言われますが、誰もが気軽に取り組みやすいものであって欲しいと思う一方で、この経験から生半可な気持ちでボランティアはやるべきではないと背筋が伸びる思いがしました。この経験は今後自らの発言や行動に一層気をつけるよう意識するきっかけとなりました。またそれだけでなく、責任を伴う活動を通して人の役に立つことや誰かから喜ばれること、そして行動を振り返って自分を知る、ということが私の好きな生き方で続けていきたいことなのだと再認識する機会になり、今後の活動の原動力に変わりました。

2 つ目のエピソードは、活動先で支援員の方にインタビューをした時のことです。「目の前にいるアスポートに来られるような家庭の子ども以外にも、最後のセーフティネットと呼ばれる生活保護の対象にギリギリ引っかけられないような(アスポートの支援対象にならない)家庭の子どもたちもたくさんいる。しかしアスポートは埼玉県からの委託事業だから税金をそこに回せず、何もできない」と、ご自身の無力さを嘆いていらっしゃる場面がありました。それを聞いて私は、見えないところにいる子どもたちに私たち大学生ができることはほとんどないだろうと、やりきれない思いを感じました。しかし、「RSL 埼玉」の最後の報告会に向けて科目担当の田中先生が授業の中で何度も仰っていた「何か提案をする場合、まず第一条件として実際に自分たちが実現可能なことを」という言葉がここで思い出されました。そこで私のグループでは、学習支援先でインタビューを行い、それを元に議論を進めていきました。インタビューでは食事が毎回インスタントになってしまうという状況や、教室で今まで行ってきた食事の提供や配布が新型コロナウイルスの影響で中止になってしまっているといった状況を聞き取り、加えてインターネット記事を調べていく中で、特にひとり親家庭を中心に食の貧困がこのコロナ禍で加速している現状を知りました。そしてアスポート本部の方々に Zoom で相談をさせていただき、学内で行う「フードドライブ」企画を考案しました。フードドライブとは、主に各家庭で余っている食料品を持ち寄ってもらう、フードロス削減にもなる活動のことです。私たちは、フードバンクのように企業からの寄付に頼るのではなく、立教の学生を中心に寄付を呼び掛けることを考えて企画しました。それは、フードドライブ実施までの宣伝活動や展示等を使ったボランティア活動報告を学生の皆さんに見てもらおうことで、まず立教大学内にこういう活動ができる授業があることをまず知ってもらいたい、つまり RSL 科目の認知拡大をねらいとしたためです。

この授業を通して、まず社会で起きていることに関心を持ち、現場に赴いて体感的に現状を知ることが大事だということ。そして自分ひとりに出来ることは限られていても、その思いを多くの人に伝えることが出来れば誰かが賛同してくれたり、社会を変えるきっかけになったりするかもしれないという可能性に気付くことができました。

(滝山)

<正課外活動の企画・実施>

「学内フードドライブ」の実施を提案した私たちのグループでしたが、授業終了後はメンバーの学年がバラバラなこともあり思うように作業が進まず、活動は難航していました。春休み中も私たち 2 人でできるだけ話し合いを重ねましたが、結局企画を実施にまで結び付けることができませんでした。そんな中、田中先生から私たち 2 人に、この企画を当初の案から規模を縮小したかたちで実施することをご提案いただきました。そこで田中先生や RSL センターのスタッフの方々と相談し、具体的には、「正課外活動」として、RSL センターが主管する科目の履修生を対象として実施するという枠組みで準備を進めることになりました。

それからの私たちは、「この活動の意味は?」「授業の学びをどう活かしたい?」「実施までには具体的に何が必要?」など、沢山の問いに改めて向き合ったことによって、これまでの提案において足りなかった部分に

多く気付くことができました。例えば、当初は、家で使い切れなかった食べ物を持ち寄ってもらう「フードドライブ」を前提に考えていましたが、物品募集の対象者を“学生”とすることから、学生もコロナ禍で同様に生活が困窮し、寄付できるほどの余裕がないかもしれないという可能性を考えました。そこで、食品に加え、筆記用具や使わなくなった参考書などの学習用具、絵本やカードゲームなどの子ども用品も募集対象とすることとしました。また、アスポートスタッフの方から提案していただいたことをきっかけに、回収した品物が各家庭に届けられるのがちょうどクリスマスシーズンであったことから、子どもたちに向けたクリスマスカードも募集の対象に入れることにしました。このクリスマスカードに関しては、ボランティアセンターの協力を得て、立教大学のボランティアセンターが束ねるボランティア団体の学生の皆さんにも作成の協力を呼びかけることにしました。

このような調整を重ね、RSL 副センター長中沢先生にご協力いただき、中沢先生ご担当科目の授業終了後の休み時間を利用して、物品の寄付を募ることとなりました。物品の回収は 2 回行い、回収実施前にはお時間を頂戴して、履修学生全体の前でスライドを用いた活動の紹介と協力をお願いをさせていただきました。

ご家庭に眠っている食品・参考書を子ども達の未来に役立てませんか？

～私たちって何者？～
私たちは全学共通科目「RSL-コミュニティ（埼玉）」の昨年度履修生です。生活困窮世帯の子どもを対象とした学習支援活動を通して、子どもたちとその家庭に立教大学内で寄付を募って届けたい！と集まったメンバーです。

～提供いただきたいものとお届け先～
特にひとり親家庭でコロナ禍、顕著となった食の困窮。そこで食料をはじめとして、学習支援教室で重宝される参考書やカードゲーム類を提供いただきたいです。今回皆さんから頂いた資源は、埼玉県で活動している一般社団法人影の子ども・若者支援ネットワーク様に私たちが責任もってお届けします！

▽回収対象▽

- ・食品：レトルト食品、インスタント食品、米、乾麺、缶詰、調味料、お菓子、飲料
- ・学習用具：筆記用具、参考書（中高校生向け）、問題集、辞書、図鑑
- ・子供用品：絵本、おもちゃ（カードゲーム等）
- ・クリスマスカード（個人名は記載しないで下さい）

回収条件

1. 賞味期限が2023年1月末以上あるもの
2. 賞味期限が明示されたもの（個包装でも）
3. 未使用・未開封のもの（個包装のものは可）
4. 常温保存可能なもの
5. 破損や汚損が無いもの
6. アルコール類（調理酒は可）とサプリメントはお受けできません

▽日時▽
第1回収：11月16日
第2回収：11月23日
いずれも水曜4限「大学生の学び・社会で学ぶこと」の授業後履修生の皆さんのご協力を心よりお待ちしております！
問い合わせ先 rikyo.syokasm2413@gmail.com

【写真 1】作成したポスター



【写真 2】活動の紹介と協力をお願いをする様子

1 回目の回収では、学生の皆さんから、使わなくなった参考書、文房具、都道府県かるたなど、“学生ならではの”物品をご寄付いただきました。また RSL センターの教職員の皆様からは、カップ麺やレトルト食品、お菓子類など、沢山の食品をご寄付いただきました。この結果を受け、予想を上回る数の寄付をいただいた一方、まだ宣伝の弱さが課題であると考えた私たちは、RSL センターの Twitter をお借りして、1 回目の回収の結果報告および次回の宣伝を行いました。

2 回目の回収では、1 回目ほどの量は集まらなかったものの、子どもたちが喜んでくれそうなキャラクターのノートや図鑑を寄付してくれた学生や、クリスマスカードを入れてくれた学生がいて、子どもたちのためにと

協力してくださったその気持ちに、私たち自身とても心が温かくなりました。

この2回にわたる回収を終えた後は、私たちで検品を行い、回収した品物の賞味期限や品質などの確認をしました。そして基準を満たしたものを、食品とその他文具等(クリスマスカードも含む)の2種類の段ボールに分けて梱包し、アスポーツ様へ発送させていただきました。

(清水)



【写真 3】



【写真 4】

集められた品物を梱包した様子

<活動の成果・学び>

私たちの活動によって集められた品物は、アスポーツ本部を通じて以下の場所に届けられました。

- ・レトルトカレー・カップ麺・インスタントラーメン・パックご飯・非常食用白飯・吉野家缶詰
→桶川センター(桶川市・北本市・鴻巣市・上尾市)
- ・パスタ・カルボナーラ・ツナとツナマヨのパスタソース・教材全て・付箋
→秩父センター(秩父市・皆野町・横瀬町・小鹿野町)
- ・お菓子・和風だし・クリスマスカード・付箋を除く文房具類
→見守り支援事業実施自治体(三郷市・鴻巣市・白岡市・本庄市・宮代町)

私たちが集めた品物は、1つ残らず、各センター(各市町村にある学習教室を地域ごとに管轄する拠点)より受取の希望が出たそうで、2人の小さな力が、少しでも役に立てたことを実感することができました。

この正課外活動を通して私が一番に学んだことは、「どんなに自分たちに思いや考えがあっても何かしようとしても、それが同じように伝わるのは難しい」ということ。しかし「理解や賛同を得られたときには、それは自分たちにとって大きな力となる」ということです。私は授業で実際にボランティアに赴き、子どもたちに直接関わったことで、「自分ができる範囲で何かしたい」「このような子どもたちがいることを少しでも多くの学生に知って欲しい」という思いが生まれました。しかし、どんなに立派な考えや思いが自分なりにあったとしても、行動に移さなければ何も始まりませんし、誰もがそれに協力してくれるとは限りません。しかし、自分たちの思いを言語化したり、何事にも一生懸命に取り組んだりすることで、いつかそれは誰かにも響く時が来ると思いました。

活動の中で、クリスマスカードの作成をボランティア団体に所属する学生の皆さんにお願いし、出来上がっ

たカードを直接受け取るという機会がありました。その際、「2 人だけで企画を行っていることが素晴らしいと思う。私も少しでも力になれば良いと思ってすぐメールした」と伝えてくれた方がいました。その方は、ボランティアサークルに所属はされていましたが、私たちの活動に賛同し、今回は個人で協力して下さいということでした。協力してくれる人がいるか不安だった私は、その一言で救われましたし、立派なことでもなくても良いから、自分ができる小さなことでもまずはやってみるということの大切さを実感することができました。

活動をすべて終えた今、私が思うことは、この企画は“自分自身を知るきっかけになった”ということです。というのも、本企画の実施には、メールでのやりとり・交渉、企画書・合意書等の書類やポスターの作成、スライドや Twitter を使った宣伝など、当然のことながら様々な作業・準備が必要でした。その中で、文章化するのが得意な自分、期日のあるものに対して計画的に取り組める自分、デザインや表現するのが得意な自分。一方、考えはあるのになかなか言語化できない自分、人前で話すのが苦手な自分など、やってみなければ分からない自分自身の姿を知ることができました。

そして何より、この 2 人で授業での企画づくりからおよそ 1 年間にわたって活動を続けてきたからこそ、お互いの長所・短所、得意・不得意を理解し、うまく役割分担することができたと思うし、それが自分自身をもより深く理解することにも繋がったと思います。この 1 つの活動を通して、子どもたちのために始めたものが、結局は自分たちの成長にも繋がったことを実感しています。

授業の履修から正課外活動の実施までのすべてにおける経験は、私たちにとって大きな財産となりました。決してこれが無駄になることがないよう、今後の学生生活に活かして参りたいと思います。

(清水)

<最後に>

本企画を実施するにあたり、温かいご指導とご尽力によって私たちを導いて下さった、科目担当の田中先生や RSL センター副センター長中沢先生、大森様をはじめとする RSL センターとボランティアセンターの皆様、アスポートの関係者の皆様、そしてご協力くださった学生の皆さんに、深く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

「RSL-ローカル(地域共生)」—人生の価値観が覆る 4 泊 5 日

文学部教育学科

三浦 紗耶

(2022 年度履修)

〈高校時代、評価による束縛〉

二人姉妹の次女として生まれた私は、幼いころから姉の背中を追って生きてきた。姉は私の憧憬の的でありながら、常にライバルでもあった。同じ土俵に上がったからには姉より良い成績を残したいと、一方的に比較してはうなだれることも頻繁にあった。よく言えば負けず嫌い、悪く言えば嫉妬深い私は、大人から褒められるのが大好きだった。親にも先生にも、「がんばり屋さん」と称賛されることで、自分の価値を見出していたのだと思う。

そんな幼少期を過ごした私は、高校生になってから歪み始めた。テストの点数や部活での功績、その他課外活動の参加率が可視化され、それが大学受験にダイレクトに影響を及ぼすという環境になったためだ。他者と自分を比較する癖があった私は、誰よりも良い成績や功績を手に入れたかった。勉強や活動自体が楽しかったわけではなく、そのあとについてくる結果にばかり固執していたのだと今ならわかる。

高校2年生のとき、私は全国大会を目指していた部活の大会で予選敗退した。第一に出てきた感情が「こんなじゃ大学に行けない」だった。さらに、常に行動を共にしていた親友が同大会にて1位通過を果たした。たったそれだけで、私は友人より学力も人望も全てが劣っているような気がした。その夜嘔吐した。小中学生時代、楽しくて努力してきたはずの勉強やその他の活動において、評価にとらわれすぎることがあまり気持ち崩壊した瞬間だった。嫉妬心から友人を素直に祝福できない自分が、他者からの評価なしに自らの価値を見出せない自分が憎かった。

〈立教で、教師になりたい〉

それから私は、なぜ自分が他者との比較や評価に過剰にこだわっているのか、この現状にはどのような社会的背景や問題があるのかについて関心を抱くようになった。入試改革によって評価基準が多様化する中で、現代の子どもたちは学力面だけでなく、課外活動や規律など、今まで以上に束縛された生活を送っているのだと身をもって感じている。そんな学校制度について問題意識を抱き、私は教育学科への進学を決意した。また教育という領域に目を向けたとき、漠然と教師への憧れは強くなっていった。

兵庫県出身の私は、遼か遠く、東京に堂々と佇む立教池袋キャンパスに強く憧れを抱いた。立教でなければならない理由を探して両親を説得するため、情報を収集していたとき、RSL 科目の存在を知った。前述したように、私は定期考査や部活動に励んできたものの、結果に束縛されるがあまり、その過程で得られる喜びや学びの有用性は実感できずにいた。事前学習・事後学習での座学に加えフィールドに出られること、学びと社会との関連を見出せることは、そんな私にとってどれほど魅力的に見えただろうか。とにかく環境を一変させたいという一心だった。「こんな授業あるの立教だけやねん」と、この科目を具体的な理由に置いて、私は何度も上京を懇願した。そしてついに、貸与型の奨学金を借りること、困ったらすぐに連絡をすることを条件に東京での一人暮らしを始めた。

〈コロナ禍での大学生生活〉

親がどんな気持ちで、無理をしまで私を送り出してくれたかはよく理解していた。必ず充実した4年間にせねばならないと意気込んでいたものの、待っていたのはコロナ禍での大学生生活だった。コロナが流行し始めて1年半経った、1年生の秋学期、新たにできた友人と仲を深められぬまま授業は完全オンラインに切り替わった。パソコンで授業を垂れ流しながら手元のスマホを眺める毎日。春学期に入会したサークルにもやりがいを見出せず半年で退会した。私が夢見ていた東京生活とはかけ離れた現実だった。評価に縛られながらも常に前進し続け、大きな期待を背負って東京に進学した高校3年生の自分を思い返すと、非常に不甲斐なく謝りたい気持ちになった。

転機が訪れたのは、2年生の春学期だった。履修登録を進めるなかで、「RSL-ローカル(地域共生)」の授業を見つけた。「対面実施予定、オンラインに切り替える可能性あり」。進学前の自分には魅力的に見えていた科目内容も、当時の意気消沈した私の心には刺さらなかった。ただ高校3年生のときの自分の希望を叶えてやるか、という軽い気持ちで応募した。この選択により、私の大学生生活は大きく変わり始めた。

〈事前学習、出会い〉

本科目を担当して下さった加賀崎勝弘先生とは、事前学習で初めてお会いした。加賀崎先生は埼玉県熊谷市内で飲食店を経営する、PUBLIC DINERの代表である。埼玉県内63市町村の個性を探るべく、地域づくりの核となる中心人物「キーマン」を発掘するなど、地域の輪を広げながらご自身の活動の幅を拡大している。一言で表すなら、地域や人の魅力を引き出す「天才経営者」だろう。最初の授業で加賀崎先生は、「Social & Public、豊かさとは何か？」という問いを受講生に投げかけられた。これが全授業を通しての大きな課題であった。

本科目のもう一人の中心人物として欠かせないのが、埼玉福興株式会社を営んでいる新井利昌さんである。新井さんは知的障がい者や引きこもり、元受刑者など一般の労働市場で就労困難な人々を積極的に雇い入れる「ソーシャルファーム」を運営しており、加賀崎先生と関係が深い。農業と福祉のスペシャリストだ。新井さんは初めてお会いした日、元受刑者が「刑期が終わって社会復帰したとしても、なんのサポートもなければ再犯してしまうのは当然だ」とおっしゃった。このとき私は、社会の問題は個人の問題、個人の問題は社会全体の問題に帰結するのだという、個人と社会の強い繋がりについてぼんやりと思いを馳せた。

〈1日目、猛暑と大自然〉

埼玉県熊谷市は、国内最高レベルの猛暑で知られる地域である。まだほとんど話したことのないクラスメイトたちと、新井さんが管轄する畑へ見学に行った。「苦手なことはやらなくて良い、分担すれば良い、教えてもらえば良い」。気候変動により左右される農業の厳しさを目の当たりにしつつ、生き活きと働く障がい者の方々にも出会った。ただこの日の私は、そこで目にしたものがなんだかお伽噺のように思えてならなかった。日常とはかけ離れた雄大な環境で、授業に参加せねば出会わなかったであろう



【写真1】クラスメイトと初めてのランチタイム

人々が協力しながら生きているのだと、どこか他人事のように感じている自分が確かにいた。

加賀崎先生の授業の特徴は、受講生全員で意見を交わす“シェア”という時間を重要視している点である。毎晩、「まとまっていなくても良いから、心にあることを等身大のまま発表してください」という声掛けをなさった。この日は全員、福祉の重要性、農業の厳しき、新井さんの仕事観のすばらしきなど、当たり障りのない表面的な意見を共有し合ったことを覚えている。しかし、徐々にこの意見交換の時間は重みを増していくこととなった。

〈2日目、仲間との忘れられない談話〉

曇天から始まった2日目は、猛暑の前日とは打って変わって農業体験に最適の気温だった。私たちは野菜の収穫や苗の栽植などを体験したり、加賀崎先生の経営するレストランで食事をとったりした。



【写真2】ナスの収穫体験の様子

能動的な活動が本格化し、13名の受講生たちの仲間深まり始めた。このフィールドワークを語る上で欠かせない経験はそんな夜に起きた。ある学生が、この日複数の農業体験を行い、出会った何人もの方々からキャリアについてお話をうかがったため、学んだことを整理しきれていないのだと打ち明けた。それをくみ取った友人が、そのときまだ眠りについていなかった受講生5、6名を集めて、とにかく心にあることを思うままに打ち明ける会を開催してくれた。このときの議論は、授業の枠を超えた“シェア”よりさらに自由度が高い議論になった。

初めは、加賀崎先生や新井さんの社会の見方にとどのような違いがあるかから始まった。私たちはそれぞれ

「かけがえのない唯一の個人」でありながら「社会の歯車の一部」にもなっていく。その中で「唯一の個人」の部分を二人の天才経営者たちはどこまで尊重しているのだろうか。やはり私たちは将来、社会や企業に適合できるようある程度は画一化されねばならないのだろうか。なぜか今の自分自身に納得できず漠然と将来が不安だ、と絶えず議論は派生していった。

実は、この会を開いてくれた友人は昨年度お父様を亡くしたとのことだった。諸手続きが落ち着くまで一時的にアルバイトをやめたとき徐々に「元の多忙な生活に戻りたくない、好きなことを好きなだけしてみよう」という感情が芽生えたのだという。そして彼は毎日、放課後に教授の発言を図書館で振り返ったり、ボランティアセンターからチャペルまで大学のあらゆる施設に足を運んだりすることに時間を費やした。就活への焦燥や遊びやお金、何にもとらわれずただ興味の向くものに時間をじっくりかけた彼は、日常に溢れる「違和感」に気づいたのだという。その中の一つとして、彼もまた部活も勉強も一生懸命だった高校時代を振り返り、社会が定める“良い子”とは誰のためのものなのかと私たちに問いかけた。

もちろん、彼の話に共感したものもあればそうでなかったものもいた。しかしそれぞれ自分もこの授業内で「違和感」に出会いたいという意識だけは共通していた。次の日以降、先生方を始めとする他者の考え方をさらに知り自分の視点を確立するため、毎晩のシェアは勿論、日中の活動内での質問や会話も活発になっていった。それは加賀崎先生や新井さんに対する「先生」というラベルや、埼玉福興の皆さんに対する自分とは遠い人という先入観を払拭し、対等な人として接する契機となった。

〈3日目、おいちゃんの宣言〉

3日目は、新井さんの畑で働く知的障がい者の方々と一緒に、「Social & Public」をテーマとしたロゴづくりのワークショップから始まった。

パワフルだが実は繊細な方、微笑みながら黙々と作業をする方、個性はありながらも障がいの有無については誰一人、気にしていなかっただろう。いけちゃん、おいちゃんなどのニックネームで呼び合いながら和気あいあいと時間を過ごした。このときの印象的な会話がある。友人が何気なく「いけちゃん、それ天才！」と言うと、いけちゃんの表情が突然歪んだ。「学校でも前働いていた会社でも能無しと罵られ続けた人生だった。こうやって誰かに認められたのは初めてだよ」。大学生の放ったたった一言で、誰かがこんなにも救われたような顔をしてくれるのかと衝撃を受けた。人々に優劣はなく、その人に適した場所の有無によって人生の豊かさが大きく変わることを知った。



【写真3】作成したロゴの全体発表

完成したロゴの意図を全体で発表していった。私の描いた加賀崎先生の似顔絵は大好評。その場の全員が笑顔になってくれた。大学4年間を必ず充実させるといふ義務感に縛られていた私は、塾や学校を訪問するアルバイトなど、教育に関する活動ばかりに目を向けていた。社会が求める、“学生時代に力を入れたこと”に早く出会いたくて、将来役に立つか否かという基準でやりたいことを切り捨てる生活を送っていた。しかし、少し絵が描けるだけでも、私を私たらしめる大切な個性なのだ気づかされた。大学生になってから、時間と、何かもわからない不安に追われ続けていたのだという「違和感」に気づくことができたのだ。

にこやかで口数の少ない、知的障がい者であるおいちゃんの番が回ってきた。彼の発表には誰もが衝撃を受けた。寡黙な彼が突然声を大にして言った。「ぼくは、ここでつくったオリーブを、みんなでがんばって、世界に広めたいです」。ロゴとは無関係の内容であったが、そんなことはどうでも良かった。埼玉福興にいる方が、単なる社会の一部としてではなく、個人が誇りを持って仕事を行っているのだと知った。そんな仕事場を実現している新井さんは「苦手なことはやらなくて良い、分担すれば良い、教えてもらえば良い」とおっしゃっていた。社会が求める個人を形成するのではなく、個人が求める社会を創る力の方がよっぽど必要なのだと学んだ。



【写真4】ロゴづくりワークショップの様子

「違和感」を探すという数人の談話から生まれた課題意識はすぐに受講生全体に伝わった。探すことに尽力する友人も、ただその活動を楽しむ友人もいたが、とにかく活動に活発さが増し、個性が現れ始めたことは確かだった。先生方も含めた“シェア”の時間、その日私は、教師になりたいのかわからないという相談を

投げかけた。教師になったら、いけちゃんや私自身が苦しめられてきた評価や点数を、今度は私が与えることになる。人に優劣をつけることの重大性を実感したからである。入学前に定めた教師という目標と、そのために1年半作り上げてきた環境とが全て崩壊した瞬間だった。他の受講生たちも思い思いの感情を共有してくれた。

〈4日目、涙の晩餐〉



【写真5】耕作体験を楽しんだ受講生たち

4日目は、野菜の収穫と耕作体験があった。私たちは裸足で泥まみれになりながら、心からそれを楽しんだ。最後の夜、収穫した野菜を存分に使ってBBQをした。恋愛相談をしたり虫刺されの数を数えたり、大自然の中で他愛のない話をするこの幸福感は言葉にならなかった。そしてついに“シェア”も最終回を迎えた。私は話ながら何故か涙ぐんでしまった。「明日東京に帰ったら、また前の日常に戻ってしまうのが怖い。見て見ぬふりをしてきた嫌いな自分の側面をもっと知りたいし、変えたい」と、率直な感想を伝えた。福祉や農業に関して知識を得るだけでなく、自分とは何か、社会でどのように生きるべきかを考える時間になっていたことは言うまでもない。

私に相反する意見をくれた子もいた。「私はみんなみたいに違和感を見つけられなかった。何も学べなかった」、「私も将来は不安だけど、みんなの向上心が怖い」と泣きながら語る友人らもいれば、「私は日常が恋しくなった、帰りたい」と発言する友人もいた。誰が1日目の“シェア”で「早く帰りたい」と言う学生が出ると予想しただろうか。加賀崎先生が初日からおっしゃっていた「まともでなくても良いから、心にあることを等身大のまま発表してください」と指示されていたことが実現したのを肌で感じた。

どれだけ意見が異なっても私は全く不愉快ではなく、むしろ楽しかった。その場にいる誰もが私を受け入れてくれているという実感があったからだ。4泊5日の間、先生やその周囲で働く大人たち、知的障がい者や元受刑者の方、学年・学部を超えた受講生たち、誰と話すときも私たちは対等人として意見を交わした。違う立場を取ったとしても、決して相手の意見を否定することはなかった。だからこそ受講生全員が本音を打ち明けられる時間ができたのだと考える。これまでの学生生活において、私は他者からの評価に固執し、常に“良い子”を意識していた。きっとその学校や社会という名の監獄での暮らしは、多かれ少なかれみな息苦しさを実感してきたはずだ。そんな中互いに受け入れ、本心で表現し合うという空間に初めて身を置き、「理想的だ」と思った。こんな学級を、学校を、社会を創れたらどれだけ良いか。私は賢い大人に言ったら馬鹿にされかねない大きすぎる夢を抱いて、再び教師を目指すことを決意した。

〈帰ってきた私の日常生活〉

事前学習で加賀崎先生は、「Social & Public、豊かさとは何か？」という問いを受講生に投げかけられた。私はフィールドワークを通して明確にそれを言語化できるようになった。Social & Publicとは、個人が社会に適合化していくのではなく、個人が求める社会を創ることだ。そのために人々には、本心

を打ち明け、認め合う環境が必要なのだ。これを実現するのに、教育はきっと大きな役割を果たすに違いない。

2年生の春学期、教育社会学という科目を受講した。この経験を経て資料を読み返すと、ミシェル・フーコーの『監獄の誕生－監視と処罰』に登場する概念に共感し、強く心を惹かれた。フーコーは、監獄“パノプティコン”について説明している。これは、円形の独房とその中心に看守の見張り塔がある大きな施設である。独房には窓から光が差し込むようになっており、監視塔から常に監視が可能である。しかし中央の監視塔は遮光の工夫が施されており、独房から内部を見ることはできない。つまり見る・見られる、の権力関係により囚人は看守不在時でも「監視されているのではないか」と意識する。そして徐々に模範的行動をとるようになる。ここでは囚人に模範囚になることを強要する顕著な権力は存在しないが、心理的ストレスを与えることによって秩序をコントロールしている。

この規律訓練型権力と呼ばれる力は、学校にも存在するとフーコーは指摘する。生徒が「見られているかもしれない」と監守の目を内面化することで、体罰などの肉体的ストレスを与える訓練がなくても、“良い子”であり続ける。さらに今日の教育現場では、私自身これに苦しめられてきた総合的評価が謳われている。学力のみならず多面的に生徒を評価することで、従来の基準よりもさらに個性の伸長ができると期待されている。しかしその表面的な意義に反して、実質的には生徒の生活そのものを束縛することにもなりかねない。

大学内での学びと大学外での経験を掛け合わせた上で、私は来年度に向けて教育社会学のゼミを志望した。「RSL-ローカル(地域共生)」で得た学びを基盤に、さらなる教育観を育んでいきたい。